



俳諧温故集

中村俊定文庫  
文庫 18  
299  
1



目録



- 一 一歩一歩の公家元武家子弟の生活のありさま
- 一 名前の釋つて人のあつたこと
- 一 昔の連年所あること其儀のあつたこと
- 一 名前のあつたこと
- 一 一歩一歩の公家元武家子弟の生活のありさま
- 一 名前のあつたこと
- 一 昔の連年所あること其儀のあつたこと
- 一 名前のあつたこと

一 花の舞の舞 久宝

風の舞 辰吉

念の芭蕉の舞 素堂

花の舞の舞 具角

對面舞の舞 而存

常の舞 貞代歌と云て舞の句二十章と

惟の又点歌とて秀逸の句と云らひはれ

此舞にて余仙と舞を

舞の舞 宗國

歌の舞 立圃

舞の舞 具角

舞の舞 具角

序

まゝの心とて入りてしるるをせんと  
はらばあはれしを舞をををを  
凡そ舞をててとてとてとてとてと  
はらばあはれしを舞をををを  
世くの舞の舞の舞の舞の舞の舞  
まゝの心とて入りてしるるをせんと  
はらばあはれしを舞をををを  
凡そ舞をててとてとてとてとてと







くらりよきしをいふもあはれし 後成たる  
も我集と撰ひあはるる時 人をもりえあ  
そいふ奇よのいふいふいふいふいふ  
ひしよりよのいふいふいふいふいふ  
よきい人のいふいふいふいふいふ  
も我集と撰ひあはるる世の人のいふいふ  
も我集と撰ひあはるる世の人のいふいふ

道進軒 貞徳述



誹諧温故集

東武 雷風菴蓮谷選

四序混雜

花を遠くけりての風

權中納言定家卿

大納言為世卿

糸のくらくらむの穂より 粒の如

西三條實澄卿

山う勢と海うはしりるる庭のち

云田の監をとりきりよ

近衛殿下信尋公

かきあはしりしるるあはれ天流の者

友佐の武を討て

為光大納言光廣卿

名をりりしるるはは初とさけ

あはれを思はせけり立花 丹武

為光大納言光廣卿

颯々流あり流一枇杷の枝

友佐の朝をばりし

同

うらうらとあはれしるるの言

同

太閤秀吉公

小田原やあはれしるるあはれ



八幡太郎源義家

乳をこぼす力もあつて

文治六年の秋奉衡を征伐の時

右大將源頼朝卿

新治よりふの軍う名を川

吾我兄弟のよき親の

教を授けしをあらはし

おののけ

畠山庄司重忠

畠山やあつしきけのまう

太閤大内侍公

柴田より川あつしきけ

細川玄旨法印

きそはのりせの教の

小堀氏宗甫

冬よりあつしきけの先佐

あ早形徹全義の時よ

長崎九郎左衛門師宗

あつしきけのつとせよ山橋

秀吉公の解法陣の時

深水三河守入道宗甫

かろくまのねり其すくまこくろ

寛永五年盛法院より

細川玄旨法印

浮世うねのまのりの子れをあり

同

よしと後まのりくるとまのり

羅山子林道春

きてねのりまのりよき具は解

慶安と改えありしを

半井ト頼法眼

改年のらまのり天下一のり

旧年五万石をりして

西岸寺任口上人

ほろくまのねり五万石あり

紫野一休和尙  
鴨長明法師

鴨長明法師

くらの山をいふにぬききまのり

紫野一休和尙

目うらや八月は花くへ

深草元政上人

梅乃花はあけしとつあつる

東海寺沢菴和尙

まむれとおうけくやぬる

紫野一休和尙

草ノ原の菊はあけし月

松花堂 昭乗

山系の菊はあけしや南禅寺

高野山楚仙上人

山系の菊はあけて配るやわ

紙園めく

紫野一休和尙

てんくの草はあけし月

愚道和尚

大ぬくのまはあつてもや梅下

西岸寺任コ上人

正房雅あつれて炭煖

同

正三位長官業和

よみ水をぬや若井の衣ん

宗祇法師

冬に秋来る日の雪ひて朝暮

心敬僧都

九ツの品川とるれ蓮う那

雨乞の吟

牡丹花岸指

えいしるやるのそのかたえ

宗長法師

梅のまよさらけく藤の枝

櫻井元佐

花のよみかたよみかたよみかた

宗類法師

花の種わびては川の天の川

救存法師

つらねの春やけのつらねの春

むの都乃らちをひを

千利休

花のよみかたよみかたよみかた

里社法橋紹巴

花の祀多あつたすまは

狩野常信

花のよみかたよみかたよみかた

瀬戸藤四郎春慶

花のよみかたよみかたよみかた

花のよみかたよみかたよみかた

千利休

花のよみかたよみかたよみかた

そらり新左衛門

我軍舎や陸軍舎ちく川の山

壘川新右衛門親富

お芥子の命を孝やまむる夕陽

春の部

歳旦

元朝や非代のころも おもひろし 寺武

元日のえきそのよせん 不二の山 宗鑑

鳳凰もやまのよききさりの年 貞徳

去承とよふやまのわたり 立圃

我等武の者もよまのよ 貞室

去承のりもよまのよ 望一

元日やぬきよるもよ 重頼

耕とよの年の経もく 西武

初着あり條るはしく金銀花 令徳  
 万歳やとあまうともも慈のす 梅盛  
 面とやと花も咲くや日のあしめ 安靜  
 赤柳の真名の一月やと柳のま 徳元  
 夜うめしてふ下のまやまのしと今 玄扎  
 とれよんやまの代をよあといま 季吟  
 新まのらまのまをたきとまあうら 宗因  
 あまのやりふ春をむるちの春 未得

雑旦

元日と田毎の日ととひもれ 芭蕉  
 漆刷をよははし山折髪 調和  
 魚のぬきもあや糸のま 幽山  
 ころねやも牧合相玉のま 不卜  
 月ねや遊園もくも老う者 舉白  
 正あよ生れわりのてら物のみ春 休甫  
 我意のねもはくも川 西鶴

元日やさねと野川のふりたる 来山  
條のうへよりかき繋ぐ後る 山夕  
種ひらく青い日はあけの春 其角  
えんややほておののむらり 嵐雪  
まよひの地帯より海へ 鬼貫  
神日りの光りわやくかみ山 一晶  
秋の空の二つ星さかり 無倫  
物言や船の音もりの 露言  
わくはつ玉もくまなく 神淑

後とく 條と新ありむのま 似船  
神言や推すりもも 鞠の音 介我  
元日の空やあまはまらり 沾徳

五十歳のまこと連ひて

兼好の死ねとつらまの春 支考  
そねり親の名をいふまは 野坡  
檀屋よりまことつらけ 沾洲  
侍保姫やまらの帝を名へ 青城  
この水や六月もあけの 貞作



けり新よ赤子の世やむのま 百里  
 え日やわらひの中れ青く舞 春風  
 も燈の明を武なき市明のま 専吟  
 芝浦や車のまよふ舟のま 超波  
 高上原や平のまよる松の春 珪琳  
 夕水や老と忘れをけり井の し白

年序

菴とふあしこの舞や 膳兼 拵居  
 竹島や秋のまよるけり 蓮谷  
 下と車や神と帆のまよる 餅夢  
 神詠やまゝ日法のまよる 菊輔  
 あ所田うねのまよる 瓢斗  
 去る山や人まよる小町のまよる 蓮谷  
 陣崎やいらはるまよる 同

用字

下と車や秋のまよるけり 黒露

人日

七つや 珠のつらね 朝鳥 具糸  
 一とやの 花のまゝ 無倫  
 七つや 珠のつらね 桃隣  
 七つや 珠のつらね 蓮谷  
 七つや 珠のつらね 起波

梅

七つや 珠のつらね 望一  
 七つや 珠のつらね 其角

七つや 珠のつらね 嵐亭  
 七つや 珠のつらね 秀和  
 七つや 珠のつらね 竹亭  
 七つや 珠のつらね 貞佐  
 七つや 珠のつらね 沼洲  
 七つや 珠のつらね 珪珠  
 七つや 珠のつらね 園女  
 七つや 珠のつらね 蓮谷  
 七つや 珠のつらね 山夕

栞

投入もくろく白き栞一節 春澄

毎ふけり風と笑ふる栞一節 不卜

入おの姿もと見せよ栞一節 調和

思ひ至てあかろく栞一節 才誓

産養ふと故衣よ志す栞一節 一由

海わけのそらりしとる栞一節 貞作

三ヶ月とゆくまらめる栞一節 助史

淀の波へる声とほりし栞一節 青峨

木兔の戯り居る栞一節 琴風

まごころく馬のわくの栞一節 立隠

美帯とぬきわたりし栞一節 一漁

八九百穴てるあるやあきりぬ 芭蕉

まき柳よあけぬかむるそ星月夜 珪琳

下くのえるよのよせぬ栞一節 成屋

猿のちうらむをさるる栞一節 蓮谷

まき柳や二か節三すし老あがり 栞居

山栞居

鶯

さきや玉梅のきぬ乃花のすゝ  
 さきや玉梅のきぬ乃花のすゝ  
 うらひすや山ハ喜ぬの逢節日  
 さきや玉梅のきぬ乃花のすゝ  
 さきや玉梅のきぬ乃花のすゝ  
 さきや玉梅のきぬ乃花のすゝ  
 さきや玉梅のきぬ乃花のすゝ

久宝  
 伝  
 貞作  
 伝  
 蓮若  
 蓮若  
 蓮若  
 蓮若

野老

ゆて世をかりのさうのおまは  
 ひとよとて人いふをぬ世をいふ  
 蓮若  
 貞佐

雑修の姿いらくまてとて人の  
 面のとて一筋貝のぬめとて人の向を  
 そとにたててや丸をいふのあれは海  
 たるものありしあはるものうら  
 ちく柳の婢嬢をうらうら又むか

串村の母いよそい世をいふ  
 くらやと題も  
 はむいてふふのめやく世老の  
 珠  
 珠  
 珠  
 珠

初年

くは年や書の新少心まほ人

旧酒

和むもやいせうんくはいん元

貞徳

はくもや狸むいあは清く居る

白雪

神午やあまの朝も来あは海流

新波

いんもや舞まはれ仲乃紅

比洲

し鳥

あはくもや何もあはれし中より 乙由

乙もやほめぬの波をほまらう

貞徳

立波もやうらう刻て雲う那

古路

世の中は横幅あはれしもろも

柳石

猫巻

出て三日人あはれいゝる猫の巻

貞徳

猫の巻物つともさうすく巻るう

琴風

後人の巻も入や猫の巻

酒堂

彼岸

精をすまひていふまじく一親の御存心 来山  
はくくうの御存心今も此院の御存心 支考  
共ついでに御存心ひいひいんくも 蓮谷  
御存心とあるまじく御存心御存心 派版

苗代

苗代は御存心ありや御存心首 才磨  
ありはくくうの御存心御存心 書四  
志はくくうの御存心御存心 蓮谷  
苗代はくくうの御存心御存心 又美

椿

山川へ御存心と御存心御存心 景堂  
御存心ハくくうの御存心御存心 光  
御存心も御存心と御存心御存心 貞代  
御存心も御存心と御存心御存心 蓮谷  
御存心も御存心と御存心御存心 批版

蝶

御存心はくくうの御存心御存心 古武

り路の足とふくくる 棚鏡の 不卜  
晴くし 凡き若ぬ 白く川の家 歌妻  
ゆめふらんし ちかふる 小蝶の 蓬若  
あつや あり九小蝶の 宿不 欠位

蛙

ふとついで 舟十上る 蛙う那 宗鑑  
附あ金の 舟か 足か 有蛙 子自  
日か 花て 月う 宿中 蛙う家 玉娥

上京吟

井筒く 都えよ 玉る 蛙う那 蓬若  
あ門の 踏あ 人く 有 蛙可を 宗瑞  
妻鶴の 舟 宿よ ちか 有 蛙う南 蓬若  
あ ちか ちか 月七 ちか ちか 蛙う家 馬光

蛙二十章

神祇

あ 橋ふ あぬの 匠入る 蛙う那 貞佐

尺教

梅よりへ写てま向る極う家 同

意

百く丸を月てうけあう子桂少 同

母常

きく船の極はけ比のかりあ 同

武士

整美ゆりどあ〜つゝ濁る極う家 同

農人

小田極嶽の翠〜りとのれき〜 同

職人

筆法のはり合〜たる極う家 同

町人

舟〜〜取めくちうき極ら箱 同

喜口

百極きあも産屋の極れ下 同

怒

き〜〜りて物矢あぬらうつ〜 同



哀

あふのけふ浮橋次の極可毒 同

樂

あふのけふ浮橋次の極可毒 同

生

山城へ出かゝりし居る極可毒 同

死

あふのけふ浮橋次の極可毒 同

昼

あふのけふ浮橋次の極可毒 同

夜

あふのけふ浮橋次の極可毒 同

晴天

あふのけふ浮橋次の極可毒 同

雨天

あふのけふ浮橋次の極可毒 同

會者

あふのけふ浮橋次の極可毒 同

定離

閑言く月影うき極るも 同

土筆

宗論やまのこをばはくし 東潮

誓古矢の先ふ女やうし 沾洲

未きうくまのつまきつとる子 貞佐

武藏地やんぬるり舞ふ系右 朝叟

離

身ひのぬいせおくりり入り 貞佐

着る丁ものまねく又ゆる離り 起波

僕らさうい天のわもゆの 蓮谷

くり言と離もあらぬ虎の母 具角

汝離やまのこら出てまのす 白雲

以干

草ほくくに川も流れて以干が 沾徳

親あしむ平目と踏つ以干の 其角

汲干てや焚くよのよる不二寺 貞代  
りあさるゝ是家物き捨る汲干の 宗瑞

### 寒食

多し合や物屋より大と焚物 奉白  
多し合や其日よあてる佛 立吟  
多し合やいふくさるゝよまぬら 琴風

### 出代

出かりやあさるゝれはらふあさる 嵐言  
出うらるゝやあさるゝの百もりあさる 琴風  
出かりや人の心もあさるけ 陸珠

### 揚

口樽よせまに於揚 山さくら 無倫  
只の所もあさるゝはあまの揚 西鶴  
逢はらるゝ揚の飯川 信山 信徳  
児孫わらふや文珠あさる人 西武



云傳く一都のむよ目し心 秦徳  
とけし人のもよのむらう 立圃

菩提山あり

ちる花をさふ江の原陀佛たみか 守武  
楸のふりむよわすうはぬすうさふ 芭蕉  
花咲て死もわかぬ物さ 来山

一花のあり

ちる花をさふ一花のあり 古 盤谷

そのむらう一も六牡丹の花をさうて  
詩もけくさや日のりさうハちらうのむら  
流く無名りの初もさうむむらう  
まもや下り花咲かされてあ後らうら  
りさうハむらう風をさうむらう  
あうハむらうのむらうのむらう  
あうハむらうのむらうのむらう  
あうハむらうのむらうのむらう  
あうハむらうのむらうのむらう



名はあつりしとて居士を信ふ  
いつちうりしとて居士を信ふ

我事してもあつるあれもの名 未 陌

赤穂のまゝ

禪さゝもよ舞もくはりの名 重 頼

おのゝあつるまゝのりまゝ  
おのゝあつるまゝのりまゝ  
おのゝあつるまゝのりまゝ

おのゝあつるまゝのりまゝ 貞 室

小夜歌やもえあつるも古也山 来 山

もゐるの御と車もやもゐる 嵐 雪

おのゝあつるまゝのりまゝ 立 園

おのゝあつるまゝのりまゝ 水 田

尼のあつりし  
を泰の住るに

花とやあつるまゝのりまゝ すすて

ゆんともあつるまゝのりまゝ 琴 風

踏舞のあつるまゝのりまゝ 山 瓢 斗

蓮谷亭のあつりし  
三井のあつりし

竜上呂のあつるまゝのりまゝ 負 作

うへと下へえいまゝのりまゝ 加 友

藤

けりふふののりや友のど  
藤もや換うつてその天の川  
貞佐

牡丹の歳旦五章

あはやまかしくと人  
室引ハ梅も惚らぬみぢれや  
管籥や引もあまの昭のま  
をまや公時らしきく山笑以  
深 素 包 袂

みせをわむ粉うりるのま  
童

春

せん丸お世とあるま春日か  
千尋の鳥より世し日の鳥  
海棠や鳴てちると平の眠り  
まらう雲のあまの谷の影  
深川の梅も如く花のど  
芳の因らるる口もある  
古立志  
宗鑑 貞室 重頼 舉白 一品



判りて布衣名はしむ 宝船 起波  
 白鳥やるるはりくは清如水  
 東茶屋へこまぐりけりし中 貞作  
 あつ海のいづれもみけけりし 専吟  
 神下のあつるきく山ははししる 浮生  
 三月とる麻てらして二月外 <sup>九</sup>秋風  
 正の愛ふはへさくき二月の醉 支考  
 系やつよりあけらるるは女在外 隆平  
 山ゆやこいりきよものと 剛の上 <sup>三河</sup>白雪

あつめんや介山のを辰とつ愛居 幽山  
 おきしはうとつらんツ志の情 恭徳  
 公はる傳説と唱へるあり孔は  
 醫ありし醫ありし俗ありし  
 かの舟人玉の舟より石を玉ふと  
 あつてし市を賣しきくあり  
 丁々思ひしこととて傳説の商  
 の字をほく句はくや

雉子乃毛と豆腐は極るは世う知 才啓

ある人のまじり

猫のまじり

印し

死

か

猫のまじり

おは

猫のまじり

猫のまじり

おは

猫のまじり

猫のまじり

猫のまじり

日光

猫のまじり

軽子

猫のまじり

夏の部

衣更

一とらりま給おるるやまふ葉 真角  
衣くあまの川瀬戸の枯あうふ 貞作

常々さきうく

衣かへらうく織ぬ罪ふじ 團女

出女の夕日ふおらり給ふ那 塵画  
長指よまかられり衣く 西鶴  
古給よの足り給よらうや 芭蕉

郭公

お月さへ給ふよ鳴々郭公 宗鑑  
さへあめの目鳴さうけき次 藻風  
鳴るさへ笑りいさうほおす 光貞  
郭るほき次とる麻合り 調和



牡丹

親王とてしほり人の参りて  
 立圃  
 眠る様をばもあら牡丹の  
 来山  
 大星とてお解し低下のほり  
 車吟  
 能とて心ほり人の未だ  
 琴風  
 名とついでいほりいのかめ  
 蓮谷  
 生貝の耳とてほりいのかめ  
 貞佐  
 入おとていほりいのかめ  
 琴風  
 あらほりいほりいのかめ  
 専吟

鯉

舟漕りいほりいのかめ  
 周竹  
 鳥のほりいほりいのかめ  
 貞佐  
 羨魚もほりいほりいのかめ  
 超波  
 戸漕りいほりいのかめ  
 英  
 人のほりいほりいのかめ  
 蝶  
 目よほりいほりいのかめ  
 言水  
 人のほりいほりいのかめ  
 素堂  
 其角

短夜

みしゝ夜のつま乃るまほや獲の沃 空存  
短夜はるゝまのまほのまほは 一品

重五

みしゝ田を流のまをどわをまを糍の家 言水  
定はるゝのまの指とハ懺の那 貞休  
懺の風をまをまをまを玉芝  
あやとくハむらあはるゝのまを 百里

五月雨

みしゝ水や傘をぬる小人形 具角  
みしゝ水や傘をぬる小人形 鞭石  
みしゝ水や傘をぬる小人形 超波  
みしゝ水や傘をぬる小人形 黒露  
みしゝ水や傘をぬる小人形 瓢斗  
みしゝ水や傘をぬる小人形 蓮谷  
みしゝ水や傘をぬる小人形 立吟  
みしゝ水や傘をぬる小人形 貞室

夏の草

梅の咲と女名や見ゆ  
あゝ智恵のあまのて咲う芥子の  
ほろあまのて咲うあまのて咲  
昔あまのて咲の島ぞ又うん  
歎ふ

まやあまのて咲う

まやあまのて咲う乳節のまやあま  
昔のあまのて咲うあまのて咲  
かゝるあまのて咲うあまのて咲  
あま

开花

このまやあまのて咲うあまのて咲  
卯の花や日光をいばばばばば  
耳のまやあまのて咲うあまのて咲  
うのまやあまのて咲うあまのて咲  
あま

田植

このまやあまのて咲うあまのて咲  
卯の花のまやあまのて咲うあまのて咲  
あま

あまのこゝろはけしむの田つづる。不ト  
あまのこゝろはけしむのこゝろはけしむ。来山  
あまのこゝろはけしむのこゝろはけしむ。菊輔  
あまのこゝろはけしむのこゝろはけしむ。隆平  
あまのこゝろはけしむのこゝろはけしむ。坂波  
あまのこゝろはけしむのこゝろはけしむ。し由

蚊

あまのこゝろはけしむのこゝろはけしむ。天代

避蚊辞

宗因述

あまのこゝろはけしむのこゝろはけしむ。次  
あまのこゝろはけしむのこゝろはけしむ。後  
あまのこゝろはけしむのこゝろはけしむ。宗因述  
あまのこゝろはけしむのこゝろはけしむ。宗因述  
あまのこゝろはけしむのこゝろはけしむ。宗因述  
あまのこゝろはけしむのこゝろはけしむ。宗因述  
あまのこゝろはけしむのこゝろはけしむ。宗因述  
あまのこゝろはけしむのこゝろはけしむ。宗因述

あまのこゝろはけしむのこゝろはけしむ。宗因



唐の詩を詩人といふは  
魏の詩人といふは  
美人の情をいふは  
瘦き柳をいふは

唐の詩や唐の詩人といふは  
魏の詩人といふは  
美人の情をいふは  
瘦き柳をいふは

人妻の情や唐の詩人といふは  
魏の詩人といふは  
美人の情をいふは  
瘦き柳をいふは

いふは唐の詩人といふは  
魏の詩人といふは  
美人の情をいふは  
瘦き柳をいふは

いふは唐の詩人といふは  
魏の詩人といふは  
美人の情をいふは  
瘦き柳をいふは

唐の詩や唐の詩人といふは  
魏の詩人といふは  
美人の情をいふは  
瘦き柳をいふは

唐の詩や唐の詩人といふは  
魏の詩人といふは  
美人の情をいふは  
瘦き柳をいふは

面影の足ももくさす  
かやう大やひさし  
うり大や飾を飾る  
面影の足ももくさす  
かやう大やひさし  
うり大や飾を飾る

蝸牛

指のふるふかき  
きき  
きき

きき  
きき  
きき

きき  
きき  
きき

きき  
きき  
きき

きき  
きき  
きき

荳

滝カのもこ出さるほほるこ家 春流  
岸舟ふらりたてある夢つる浦 其角

を国言よし

秋らうしよの代はを 鳥夢 一秋  
まのまの川白りほほるこ家 貞代

宇治川の夢もよの世に

かこよよ合致たりよ 飛夢 終六  
秋も流ほもなり 書よ 飛夢 貞代

通象の改申よ 包心夢の那 秋波  
跡足の思ろ新く 西の夢ろも 蓬若  
愚ろくく 棘とはく心 夢ろの那 貞代

鴉船

鴉舟のよのきハ人の月よ 貞代  
あやふらして 秋てう 新刺る 舟 貞代  
石が電燈やう 階り 鴉舟 貞代  
ふあふらと 心の声く 心く 舟 貞代  
秋の 夢ろ 飯ろ 舟 貞代

積りてははらうんきまらん土用干 去来

舟干や一巻を通り空はの山 負作

卯干や心の後にはあくとと 百里

舟干やんぬ世の白ひなふらん 蓮谷

舟人や木まのかけて土用干 千

蟬

秋て死なむりかきハんまの蟬の声 芭蕉

かりくもあはたり果て何と蟬 西武

せんさくの社ふ蟬鳴り夕日うを 社国

ふらうと平蟬を雀も物うと 其角

暑

舟入のくまのしつる人暑の那 珪琳

日の曇りしうけしあつさ年の舌 正秀

暑より又涼りふ森の暑の舌 貞佐

花の繁

川竹の節はあつと暑の南 起波

夕飯はいかにと暮あうりあきうち  
負さるよはあなうりあつさる  
物もあつさる指し  
安土  
蓮  
宗程

納涼

切花の江戸へはくあつさる  
16 酒

あつさるよと送るよあり夕涼  
涼く門へあつさる夕涼  
あつさる

涼くの中や鬼あつさるよあり夕涼  
あつさるよと送るよあり夕涼  
あつさるよと送るよあり夕涼

春

去人のあつさるよあり夕涼  
あつさる

夏神の... 玉懸  
授雲よ... 性羅  
か... 染衣

清水

日... 常牧  
楊梅... 未陌  
石佛... 一品  
思... 花兮

蓮

そ... 歌  
六月... 珠  
蓮の... 欠  
小... 咲  
誓... 又

白雨

巾... 不卜

百鬼の夜

夕ぐしや田とよめケリの子あは キ  
 中めまや牛のをト乃神座や久 玉  
 ともや泣もあふまぬま日中 蓮  
 夕まやさもあふ人の腕や久 鳴  
 やあそちや赤玉とあふる傀儡師 キ

夏

雪月花つまふ見するお月が 久  
 吹れの梅こころいりあはせ 久

七合の天地をまぐる夏衣 キ  
 かあふあはる根乃あそまのあ子 久  
 まけやあらののかおねあ 一  
 月神やねああへいさあ山 山

雑

ひとくらあやちあらうと釋迦 一  
 灌佛や乳ハきまあま比丘尼 乙  
 めつりや八枚の中れあまの雲 山  
 八とあやああああい虎 キ

舟人のまはりのまきや水の原 雪の  
 心くまらむむしやうは冷めお山椒 吟市  
 あり籠の温公くみやまの糸風 松波  
 かる道草や雪のふとを静とて 似春  
 りともふもすもすもみ月やを 陸珠  
 竹のまや波縁のう矢の枝不 三細  
 鬼野や星のたや一の風をちき 久代  
 あり月やありん海をそ 志 崇堂  
 い裏の有常とくそ 相のむ 冠子

風辨

山嵐雪迷

志うあまの毛いさちて襟のふとさし  
 吹るる服粒のまらるるものけすりもてす  
 まくおのうよ筋一筋ち月鏡かまよ  
 きて集うさぬを何ひんるよはらぬ  
 き腸呼吸もつきて動揺ゆくもをこ  
 きらくいとんすくまはにのうさのわくせ  
 怒けたのう護十堂のゆすすの三考





百由旬より蟬蟬の細細をうくるまゝ  
ひらきつて憎愛わらざるあり  
見えぬ月程のおぼろがる聖りのちぢの  
光りふいあふみか捨つるまゝの  
化のさすあふすりきるとして知識の肌よ  
訓やまゝのてはとねいふまゝの  
はるべき月程のや柱の売らう生とて  
わけて旧年のあふ人よまゝの  
あれまゝのいふまゝの

おぼろぐの陰をよれ地獄すまゝの  
あふまゝのいふまゝの  
つらとて捨つるあふまゝの  
測りあふまゝの人のあふまゝの  
てまゝのあふまゝの  
究よまゝのあふまゝの  
まのり

題風

まゝの風をよれまゝの  
芭蕉

雲霧をくぐり雲の常なる如くし 其角  
 雲の如く風も下りて常なる如く 才誓  
 ささきさき果敢てくちれ風は 尚白  
 穂を揺るかりりる石もささき 沼洲  
 流るる風もは心 大相 琴風  
 ちよきすや富貴の風もの中 洛通  
 瘦て来るる藤陣の風も 序令  
 風あり穂もなかりり白松在士 百里

雲

不二の山雲々柔白乃おのひる 芭蕉  
 系法をあるは 雲のり来る 才誓  
 それを人形ひためや令の雲 嵐雪  
 ぬり揃ふささきや雲の逢の末 尚白  
 雲の似しとて人 百里  

 享保己酉のし 南粵とらふあふり  
 云を日本へけりて 同云の五日  
 ありて家とてささきけり

天竺の帯をわくやあらし 沾洲

大泉の傾海ありあつさう邪

古 青 嶽

今や幾不二のありしのかうり

京 仙 鶴

るほろろ残帳と象のさやうん

泰 室

面さめと牙の海しよ小片く系

超 波

その鼻てわろへういうも老花葉

蓮 谷

ふの衣の穿はわうやく 花三序

蓮 之

かのもや海と念の象はしき

貞 作

乾のまは終りやうりきりあを月

江戸書林 源 六

かみ 新 定 彦 流

